

エデンズリッター
EDEN'S RITTER

淫悦の聖魔騎士ルシフェル編

お試し版

著 和知まどか
画 Q-Gaku/モグタン
原作 Waffle



ふじはら文庫

「やめて……っ、やめてくだ、さ……あつ、あああつ……！」
ジタバタと四肢を動かし、力の限りに抗おうとすればするほど己の無力さを痛感する。
果てのわからない暗闇の中、ほのかに輝きを帯びた十字架に磔^{はりつけ}にされた私達は天使の衣を
裂かれ、乳房と膣口とを同時に剥き出しにされてしまった。
（っ……あ、ああ……締めつけが強力すぎて、くうっ……逃れられない……!）
湿り気を帯びた空間の中、ぴちゃりぴちゃりと濡れた水音が鳴り……私とノエインは
随分と長い間、こうして触手に肉体を締め上げられ絡みつかれて囚われていた。
「ひ、姫様……! 姫様、あつうあつ……あつあつあつ!」
「ノエイン……! だ、大丈夫ですかっ……い、今、私が助けます……か、ら……!」
私が身じろぎすると、それを危険と察知したのか濡れた触手の先端が割れ目を執拗にね
ぶり上げてくる。
「んんあつ!? あつ、あああつ! い、いやあつ、あああつ……!」
粘膜という粘膜に媚薬を塗りたくられ、身体のは照りは異常なほどだ。
「ひあつ……! あああつ」

プロローグ 敗北の天使達



EDEN'S RITTER

エデンズリッター

魔剣の聖魔騎士ルシフェル編

目次

プロローグ	敗北の天使達
第一章	ルシフェルの章

身をよじれば触手もそれに追従し、今度はクリトリスに激しい熱を感じてぶしゅうつと愛液が溢れ出す。甘酸っぱい香りが立ち上ってきて、私は自分が感じていることを痛感させられてしまった。いつ、どこで何を間違えてこんなことになってしまったのか。そのきっかけは思い出せず、ただ強烈な快楽だけが白い肌を、桃色の秘裂だけをまさぐり這いずり続けていた。

「っああ……も、もうやめてください……！ 触手はもう嫌、嫌です……っ」

このままでは、エデンズリッターのエナジーを吸引され、なすすべもないままに死ぬまで犯され続けることになる。

(どうにかして反撃の機会を狙わなければ……でなければ、私、達は……)

とめどなく送り込まれる快楽に負け、尊厳を奪われ愛液を撒き散らしながら絶命する。そんなことはどうしても許せなかった。けれど……。

「あ、ああっ、グリグリしないれ……えっ、ああっ、入っちゃう、入っちゃう……うつ」

「んぎいっ、太いっ……太すぎる……うつ、ああ……！」

やめてくれと懇願するノエインの声も、恐怖に引きつる私の顔も……無視して触手はぐちゅりと水音を立て、無理やりに膣内へと捻じ込まれてしまう。

「っひいっ……いいいいっ！」

ノエインがのけぞると同時に、私の方にも腰が抜けるような快感が、膣口から膣奥までを串刺しにするのがわかった。

「んんんっあぐううつ！ な、中はっ……膣内はダメ、ダメええええ……！」

脳神経が痺れを起こし、ガクガクと腰が震えてまともな思考も分断される。

「あっ……しっかり、しっかりしなくてはいけないのに……っ」

ここから二人で逃れるすべを思い描こうとすればするほど、目の前が白く塗り潰されていく。

「ひっぎいっ……！ うあっ……あっあっあああ……！」

触手は膣穴を限界以上にまで拡張しながら、ゴリユツ、ズニユツと容赦なく動き出す。

「んあっ!? あっはあああああ……！」

私達はビクビクと全身を痙攣させながら、ただ圧倒的な辱めに耐えることしかできなかった。

「あっ……うううつ、うあああ、ああ



……！」

狭い肉穴に何本もの太い触手を挿入されている私、そして大きな乳房を揺らしながら下半身では膣口と尻穴にヌグヌグと巨大な触手を咥え込まれているノエイン。

「ああっ、あああっ……ひ、姫様……あ、見ないで、見ないでください……！」

恥辱に頬を赤く染め見悶える彼女を目の前に、私は私で激しい疼きを乳輪に覚え、乳首からわずかに母乳が漏れ始めているのを感じていた。

「あひっ、はひいっ……んぐああっ！ 太すぎます、大きすぎます……ううっ」

「んいいいっ！ あがっ……はへええっ、いあっ、ああっ、ああーっ!!」

太さを増した先端が子宮口を叩き、強く突き上げられるたびに肉体が上下にきつく揺さぶられた。

「んひっ、あっああっ！ だめっ……掻き回しちゃっ……ああっ、だめえええっ!!」

欲望のままに膣内をほじくられながら、触手はゴリユツと限界以上に肉路を広げていき私達の身体を淫らなものへと変えていく。

「はああっ……あっ、あああっ……んいっ……いぎいいっ！ はあ、はあ、はあっ」

ぐっぽぬっぽと頭を出し入れする触手の動きにつられてか、唯一自由な腰が前後に揺れて愛液がばたばたとそこらじゅうに撒き散らされる。

「いやあ……いやあっ、だめっ、こんな、の……!!」

偏執的なほどに執拗に、子宮口をこねくり回す触手に強烈な快感を味わわされながら淫

らな水音を絶えず聞かされて、ただでさえ蕩けきった理性が蒸発していくのを感じた。

「はっ、あああっ……!! へ、あ……あっ、あっ！ あひいいいっ……!!」

「ノエツ、イ……ンゾっ……!! んっ、おほおおお……!!」

ギュルンズニュルンと触手の先端が私達の膣奥を舐め、普通に生きていれば一生知ることのなかったであろう禁断の快楽に二人で奇声を上げて白目を剥く。

「ひやめっ……あっ、ひああああ……!! あっ、んひいっ！ それっ、らめっ、あっ、あっらめっ、らめええええ……!!」

「イツ……ああああっ！ あーっ、ああああーっ!!」

私達は腰を突き出し、狂ったように潮を吹きながら絶頂した。

「んあーっ……!! あひっ、はひいいいいっ……!!」

「吸われっ……吸われてく、はひっ、ひいっあっ、かはっ……ああああーっ!!」

私達の絶頂を感じてなのか、すぐさまエナジーの吸引が始まる。

「あぐううっ!! がっ、あへああっ、ああっ！ ひああああっ!!」

「やめ、やめて、吸わないで、吸わないでえ……ああ、ああああーっ!!」

身体との奥、生命として最も大切な氣力を根こそぎ触手の口が吸い上げる。その魂を直接貪られ、引きずり出されるような衝撃が追い打ちのように快感を生じさせてますます私達を錯乱させた。

「んいいいい……っ、へあっあっ……あああんんっ、ふああっ、んああああっ!!」

「あーっ!? ああああっ! 怖いっ、ノエインっ、ノエインっ……!」
色とりどりの悲鳴を上げながら、私もノエインも大きく口を開け、涎を垂らしながら絶叫してしまう。

「んあっ、ああっ、あああ……らめっ、これ以上やられたら、やられひやらああ!」
ぐっぽっぐっぽっと絶頂の最中に膣奥を突かれると、もうたまらなかつた。

「んぐうううーっ、ぐひひひひーっ!!」

私が高量の潮を噴くのと入れ違いに、ノエインが透明の汁をそこら中に撒き散らす。

「んっあっ……あへあああっ……あっ、がああっ……!」

吸引、抽送、そして再びの吸引、強い挿入。永遠とも思えるほどに繰り返されるその快感で絶頂を数十回ほど体感したところで、新たな触手が私達の身体にぐりぐりとなすりつけられた。

「いやああっ……も、もうやめてっ、もう……!」

これ以上の快楽を与えられれば、私達は間違いなく失禁し気絶し狂ってしまうだろう。

「い……い、一体何をするつもりだ! 姫様と私にこれ以上……!」

無様な姿を晒させるのであれば、とノエインが吠えたその瞬間。

「んんんあああーっ!!」

私の乳首にまわりついた触手が、敏感な乳頭をこじ開けて乳房の中へと入り込んだ。

「いっづいいいっ……! ひひひひーっ!」

「姫様! 姫様あっ……あがつ!? あっぐっ……私も、おおお……っ!」
ちゅろちゅろと音を立て、乳腺の中を責め立てられる私が喘いでいると、同じく乳首を

犯されながら、ノエインはさらに肛門を深々と蹂躪されている最中だった。

「んひひいっあっ、あへああっ、あへっ、あへええっ! あっ、んああああおっ!!」

力の吸引が終わってなお、快感だけが爆発的に増えていく。私は乳房を、ノエインは肛門を……それぞれの弱点を的確に犯される快感は、エナジーの吸引の威力にも何ら劣るものでもない。むしろ、単なる肉体的快感が力を奪われることよりも気持ちがいいことが、自分達が淫乱に堕ちた証拠のようですます心が濃みドロドロと濁っていくのがよくわかった。

「よ、弱い天使で……ごめんなひやいいいっ!」

「んっあっあっへあああ……触手でっ……あひああっ、大事なところっ、かきまわひやれて……あぐうっ! 感じる天使でごめんなひやいいいっ!!」

蛇のように自在に蠢き、ノエインの膣内と肛門を犯す触手がまったく同じ乱暴さで私の乳房を……乳首をこねまわし狂わせていく。

「あ……申し訳、申し訳ありますふえん……ひ、姫しゃま……あぐうっ! 淫魔にっ触手に負けてしまっだなんて……ええっ、あぎいっ、んぐううっ、ひぎいっ!」

「そ、そんっ……わたひも……わたひも一緒、です……あっ! 触手に負けたのはあ……んぎあっああ……いひひいっ! ひっああっ、ああ……!」

人外がもたらす異常なまでの刺激に骨の髄まで浸され、もうこの快感のためならばどうなっても構わない、この快感を失っては生きていけないと考えてしまう自分がいる。姫として、エデンズリッターとしての矜持が折られ、ただ悦楽のみを貪る獣へと墮落した瞬間。ついにそれはやってきた。人間の数百倍もの濃度と排出量を誇る触手精液の射出。つまりは、私達を終わらせる射精を触手達が一齐に開始する。

「あぐううっ!? おぐっ、んんぐうううっ、いぎひいいいっ! ごふううっ!」
ノエインの口から不気味な破裂音が聞こえ、彼女の美しい唇から触手がごぼりと頭を出した。

「ンごああっ……! おぼっ……んおおおお……っ!」

ビチビチとうねりながらノエインの口元から突き出した触手に驚く暇もなく、今度は私の精神までもが汚染され、甘い喘ぎが漏れ出してしまった。

「んんおおおっ、おほおおおおっ♪ おおおおおーっ……♪」

私の嬌声とノエインのえづきとが同時に闇にこだまする。膣奥に熱い精液を流し込まれながら、もはやビクリとも動かないノエインが、大量の精液を膣口から逆流させ淫らな表情のまま絶命していることからしても……どうやら私の命もあとほんの少しというところだろう。「っうあっあっあっあっ……どうして……どうしてえ……!」

……触手に犯され、真っ当な人間ではとても受け止めきれない量の汚濁を子宮に注ぎ込まれながら、薄れていく意識の中。私は願わずにいられたかった。もし、もしも、私達



がもう一度……あと一度だけ、やり直すことができたなら。その時はどうか、こんな結末には至らないよう……。神樹セフィロト様を選ばれし天使として、どこまでも優しく、いつまでも気高き戦士であり続けられますように……。

第二章 ルシフェルの章

「つはあつ、はあつ、はああつ……!!」

逃げる、逃げる、逃げる。何度も転びそうになり、足を絡ませながら教会の深部をひた走りながら……。聖王国エルアラドの第一王女……。私、セシリイ・エルアラドは汗だくになった身体を何度も何度も奮い立たせて駆け続けていた。

「シギヤアアアッ、アギヤアアアッ、ガアアアッ!」

巫女の装束に身を包んだ私を、わずかな距離を挟んで追い立ててくるのは魔物。淫魔と呼ばれる恐ろしい化物……。血にまみれ汚れた刃を振り上げながら人々を殺して回る残酷で醜い敵だった。

「ノエイン……ノエインがいてくれさえすれば……!!」

運悪く、今は遠方へと魔物退治に向いている女騎士……。誰より強く、美しく、頼りになる聖騎士団の長、ノエインの顔を思い浮かべても事態は一切好転することはない。

「ガアアアアアアッ! コロス、コロス……犯ス、ギシヤアアアッ!」

「つきやあああああーっ……!!」

エルアラド聖王国に魔物が出現するようになったのは、もう随分と昔のことだった。こ

数十年には大きな戦争もなく、国民が平和の喜びと幸せとを謳歌してきたこの国に突然出現したほころび……。そう、それは魔物の出現だった。人々の心の隙間に入り込み、不和の種をばら撒き、何よりも善良な人間達をその牙に、暴力に、殺戮に巻き込み暴れ回る脅威……。国家として最大の敵である彼らを、今まではなんとか国直属の騎士団が撃退し続けてくれていたのだ。そう、今日この時、までは。

「聖都セフィラムに……。いえ、聖なる教会にまで魔物の手が伸びるだなんて……！」

エルアラド聖王国の最深部、民の信仰の元でもある神樹セフィロトを抱く神聖なる地。

神樹を守るため、また祈りを捧げるために造られた教会の中にまで魔物が現れたのは月が夜空に浮かび、暗闇が国一帯を静かに包み込むような静かな夜のことだった。

「に、逃げてください！ 皆さん！ 魔物、魔物ですっ！」

私を追う淫魔の名はオーク。半人半獣の怪物であり、その見た目は怖気おそげがするほど醜悪だ。彼らは人よりも数回りは巨大な身体、そして人を殺すただけに特化した筋骨隆々な肉体から強く悪臭を撒き散らし、大振りの槍を振って歩く。

「おっ、おっ、お前、聖女……。だな？ 王族の血を引く神聖な……。女……。！」

オークは地を揺らし、ズシンズシンと音を響かせながら私にゆつくりと手を伸ばす。

（こ、怖い……！）

恐怖に身がすくんだものの、その場にとどまり続けて、私以外の誰かを……。逃げられずに座り込み、悲鳴をあげて倒れた人々に標的を変えさせるわけにはいかなかった。

「た、食べるなら……。まず私を食べなさい！ で、ですが私はそう簡単には捕まりません……。私を食べたくば、見事私を捕らえてみせなさいっ！」

挑発し、自らの身体を餌としながら、皆を逃がすための入り口とは逆方向に……。教会の奥へと逃げ込んだものの、長いスカートの裾をつまみ、必死に駆けつけたところで追いつかれるのは時間の問題だった。

「ぎひっ！ おおい……。！ もう追いかけてこは終わりかあ……。!?」

わざと私を捕まえず、追いつくギリギリの速度で追い立て愉悅に浸っているオークを振りきって長い長い追いかけてこの果てに私が辿り着いたのは、神樹セフィロト様の鎮座なさっておられるエデンの間……。全ての信仰が集まる聖地だった。

（エデンの間……。い、行き止まり……。！）

もはやここまでと悟った私は、せめてもと床に膝をつき、手に手を重ねて願った。

「わ、私はどうなっても構いません。ですから民を殺すのはやめてください！」

「ゲヘヘッ、オマエ、馬鹿か？ なんで弱いお前の命令、オレが従う？」

「えっ……」

「全員、殺して犯す。男は串刺し、女は凌辱、ソレガ淫魔のやり方！ ゲハハハハ！」

「そんなんっ……。！ そんなんっ!!」

さつと顔を青ざめさせながらそれでも私は祈った。おぞましい生き物である魔物の足元にひざまずき、額を地につけて懇願しつづけた。

「お願いです、お願いですっ！ 民だけはっ……民だけは傷つけないでください、わ、私なんでもいたしますから、な、なんでも、望みを叶えますから……ッ！」

「ヒ、ヒヒヒッ、安心しろ、最初にお前を犯して食ってやる、他のヤツはその後だ！」

「っひいっ……お願い、します！ 犠牲はどうか、どうか私だけに……っ！」

ガタガタと震えながら、繰り返し叫ぶ私の脳裏に、ふいに温かな声が聞こえてきた。

——心清らかなりし、高潔なる人の子よ——

「ギエエッ!!」
優しく、しかし厳しくもある尊い声が響くとともに、突如私の周りに強風が起り……私を押し倒そうとしていたオークを吹き飛ばした。

——人の子よ。選びなさい。このまま、座して死を待つか。それとも、戦い生き延び、そして明日を掴み取るのかを——

「神樹セフィロト様……?」

私は、はっと我に返り真後ろで淡く緑色の光を放ち始めた神の樹に振り返った。

「セフィロト様の、お声……?」

——禁忌の力、エデンの力を操れば、あなたには辛く苦しい試練が訪れるでしょう。それでも、この力を望むのですか?——

その声を聞いた瞬間、私の心はもう既に決まっていた。ノエインのように、気高き騎士団の長である彼女のように私にも力があれば。誰かを守る力が得られるのなら、私は何を失っても構わない……!

「の、望みますっ、求めます！ セフィロトよ、神樹に宿りし女神よ！ 私につ、どうかお力を!!」

大声で叫んだ私は、大樹から光が降り注いでくるのを感じていた。

——ならば与えましょう。『エデンズリッター』……楽園の騎士として戦う力を!——

「あ、あああ……!」

恐ろしいまでの力が私に集まり、荒々しい風のように吹きすさぶのがわかった。

「エデンズフォースッ！ オーバーロードッ!!」

纏っていた装束が光の粒子に変換され、一瞬で再編成されていく。同時に凄まじい力が……エデンの力が私の身体を駆け巡っていった。



「心に祈るは神の愛、剣に宿るは魔の力！ この身に装着^まうは禁忌の聖衣！……エデンズリッター・ルシフェル、ここに降臨ッ!!」

バサアッ、と白い羽がはためき、気づけば私の右手には聖なる槍が握られていた。まるで天使の祝福を受けたかのように、白い光に包まれて輝くその槍の柄を握りしめると私は別人になったかのように、豪奢なドレスを、エデンズリッターの装束をはためかせる。

「この槍は……魔聖槍ルミナーク、光り輝く貫きの王……。神の力と、この槍の加護をもつて、あなたを滅ぼします。悪の徒よ!!」

私はオークの身体に槍の矛先を向け、照準を定めるとそれを一気に突き出した。

「ぐぎやあああつ！ ああああーっ！」

叫び、槍先に貫かれ浄化されようとしているオークに向かって、私は頭に浮かび上がった禁断の魔法を解き放つ。

「すべてを浄化する聖なる炎！ ノーブル・イグニスッ!!」

轟音と共にほとばしった真紅の炎は、オークを包みこみ一瞬で消滅させた。

「エデンズリッター……」

私は、自分の部屋に戻るなり神樹セフィロトの与えたもうた力について思案した。まだ、手が震えている。自分が成したことが信じられなかった。天使のように白い羽を揚げ、鋭い聖槍と禁断の知識による絶大な攻撃魔法を放つ存在。神にも等しく思えるほどに強大な

力を持った、楽園の騎士……エデンズリッター・ルシフェルとして覚醒した自分。

「逃がしませんっ!!」

あの後。初めての変身の後、消滅の寸前で逃げ出したオークを、私は追った。そして風のような速度で飛翔しながら、月を背に……魔物の命を絶つたのだった。

「マジエステイ……ルミナスジャッジメント! 光に射抜かれ、消えなさいッツツ!」

オークの被害が他に及んでいないことを確認した後、家々の屋根の上を飛び、王城の端……自室のある尖塔までたどり着いて、数刻。ガラスのはめ込まれた窓から室内に入り、変身を解いてなお、私の身体が細かく震えている。

(この力は、絶対に他の人に知られてはいけない……)

エデンズリッターの力は教会が教義によって禁忌と決めた魔法、それを手にしたことは間違いない大罪だった。

(過去に読んだ経典に記されていました……)

その昔、私ではないずっと前の巫女姫が、禁忌の力に触れた末に狂い、魔女として処刑された話が。

(それから、この国では神樹セフィロトの力を使うことは法で固く禁じられている)

……私はぎゅつと手のひらを握りしめ、自らが選んだその力に思いを馳せた。

(この力は……決して自分のためには使ってはなりません。民を、国を救うためにだけ使います。ですから……ですから、どうか、今だけは見逃してください、皆さん……)

それから数日後。ざわざわと城内がざわつき、外から漏れ聞こえてくる声で目を覚ました私は、ベッドから出るとカーディガンを羽織って扉に近づいた。

「……あの、何かあったのですか?」

この部屋を守護していた近衛兵に問いかけると、張り詰めた声が返ってくる。

「はっ。セシリー様。お騒がせして申し訳ありません。どうやら市街の方で魔物が出たらしく、ただいま部隊を編成し討伐に向かうところ、とのことですよ」

「……ま、魔物が? 大丈夫なのでしょうか……」

「ご心配には及びません。早々に討伐されるでしょう。姫様は安心してお休みください」

「……は、はい……」

(けれど……街はどうなのだろう?)

屈強な兵士もおらず、分厚い城門もない市街地で今この時も民が怯えているのではないかと思うなり、私は行かなくてはならないと胸の奥で決めていた。

「ここで行かずして、何のための力でしょう。つ……そうですよ、セフィロト様!」

ばつ、と窓へと駆け寄ると私は身を乗り出し、街の方角へと尖塔を飛び降りた。そしてありったけの声で叫ぶのだ。勇気を込めて、力を欲しながら。

「エデンズフォースッ! オーバーロードッ!!」

聖なる衣を纏い、羽根をはばたかせて街へと向かうと……すぐに、眼下に魔物に追い立てられ、傷つき逃げまどっている民の姿が目に入った。

「グエーへへッ、げひっ！ 男は殺す、女は……犯す、ヒハハハ！」

一体どこから湧き出てきたのか、私に襲いかかったあのオークが群れを成して街中を闊歩し凄惨の限りを尽くしているではないか！

「つくっ……！ ゆ、許せない……！ すべてを浄化する聖なる炎よ、焼き尽くせっ！！
ノーブル・イグニス……！！」

「ぎああああああつ！！ あぢいいいつ、あぢいいいつ！」

私は屋根の上から魔法を放ち、熱に焼かれ散開するオーク達を見下ろした。すると、淫魔に襲われていた人々が顔を上げ、私の姿に気付いて声を上げた。

「天使様！ 天使様だ！！ 天使様が救ってくださった！」

「ああ……天使様！ ありがとうございます、ありがとうございます……！」

何百という数の人々が歓声を上げ、自分を見上げているさまを見ていると不思議と身体が高揚してきてしまう。

（教会で戦った時もそうだった。これが、力を持つ者の見る光景……！）

ゾクゾクと快感に似た感覚が肌を這いあがり、それを抑えるのに苦労した。

「いけない……！ ノエインのように、強くなりたいと願ったばかりなのに……！」

己に言い聞かせ、人々をその場から避難させながら私は地面にふわりと降り立った。

「ルミナーク！！」

聖なる槍を振るい、一匹、二匹と野蛮なオークを狩りつつ抜け目なく彼らのボスを探す。

（彼らに命令を出している者がいるはず。それとも……）

魔物には騎士団のような統率はなく、個々で人々を襲っているに過ぎないのだろうか。私が疑った頃にはオーク達はバラバラの方向に敗走し、真実を知ることが叶わなかった。

（私ができるのはこのあたりまで……後は城の兵たちに任せましょう）

魔物の影が少なくなったことにホッと安堵し、その場を立ち去ろうとした時だった。

「ひいっ、ひいっ、お助けを！」

一人の中年男性がこちらに向かって悲鳴を上げながら転がり込んでくる。

「……！ 魔物に追われているのですか？！ 私が倒します、下がってください！」

「は、はい。ああ……助けてくださってありがとうございます！」

どこかで見た顔だ、と思った瞬間私の唇が強引に、その男の舌によって奪われる。

「んんっ!? んーっ、んぐっ……!?」

彼が以前、顔を合わせたことのある貴族の一人……ガラフ卿であることに気付いても既に手遅れだった。チュルチュルと舌で唇を舐め回され、私は生まれて初めての口づけを臭い息を吐く男に奪われ、衝撃でガクガクと膝を笑わせてしまう。

「つちゅっ、くちゅぷっ……な、何を……！ が、ガラフ様……っ！」

「ああ……姫様の唇は柔らかく、唾液は蜜のように甘いすなあ……それに……ひひっ」

彼の手から、重なる唇から逃れようと必死にもがく私の目の前で……ゴキッ、ゴキリと骨が砕ける音のようなものが聞こえてくる。

「このむっちりとした尻。この尻を鷲掴みにして、顔を突っ込みたいと以前より思ってたのですよ、姫え……！」

気味の悪い下品な台詞を吐きながら、彼の骨格は異常な変化を遂げていた。体毛という体毛が生え変わり、全身をびっしりと獣の毛が覆う。

「ひ、ひいひいひい……!!」

腕にも羽根のようなものが生え、巨大な蝙蝠の姿に……淫魔の姿に変容していく！

「あ、あなたは……魔物!!」

「いいえ……人ですよ。無論、『元』がつきますがねえ♪」

キキキキッ、と甲高い鳴き声を上げて彼は私の身体をガッツリと長い爪で抱き寄せた。

「私は……いいやつ！俺の名はゼノバット!! お前の身体に満ちる禁断の力ッ、エデンズエナジーを渡してもらおうっ!!」

「ひいっ……ひいっああああ……!!」

このまま、この狂った男の言うなりになつてはいられない。私がその腕を、身体を払いのけようとした瞬間乳房を握られ、ズグンと下腹に熱を感じた。

「はあ、はああつ……んんっ、くう……っ」

(な、に……? 胸が、胸が熱い……!)

激しい性欲のうねりを感じながら、額からこめかみから噴き出す汗に戸惑いよろめく。無意識のうちに擦り合わせた太腿からは、ニチャリといやらしい水音がした。

「っあつ……あああつ、あふううっ……!!」

糸を引き、垂れ落ちるその雫を意識すればするほど身体が……セフィロト様からお借りした力を刻み込んだ聖痕によって胸が熱く火照り始める。

(い、息をするだけでも熱い……私の身体はどうなってしまったというの……?)

「は、はなしなさい……っ!」

フラつきながら抵抗しようとした私は、超至近距離からゼノバットの衝撃波を食らってしまった。

「あつ、がっ……くううっ!」

淫魔の口元から放たれた衝撃の影響を取り去る前に、ゼノバットの鍵爪が身体に食い込み、私を抱えたまま、空へ高く舞い上がった。

「ヒーツヒヒツッ! キヒヒツッ! ついにっ、ついに来た! この俺がこいつの処女を散らす時がなあああつ!!」

おそらくは、貴族であった頃から……人の身で暮らしていた頃から、この男は私の身体を淫らな気持ちで見つめ続けてきたのだろう。強靱な力によって剥ぎ取られた衣服から溢れ出した乳房、そして大きく開かされた脚を視線だけでもねっつりと視線で犯しながら

淫魔は下品な哄笑^{しやうしやう}をやめはしなかった。

「いやっ……いやっ！ 放し……っああっ、は、放してくださいっ！」

羽交い絞めにされながらもがく私を、ゼノバットはゲラゲラと嘲笑^{あざわらう}う。

「この俺から逃れられるわけがねえだろう、世間知らずの聖女様よ……！」

空中で羽交い絞めにされた私が、どれだけもがいても淫魔となったガラフの腕からは逃れられない。ゾワゾワと寒気が走り、私は身体をすくませる。

「で、こんなことをして……あなたの行いを、神はお許しにならないでしょうっ……！！

そ、そうです、聖騎士団だって淫魔であるあなたを退治にくだとは思わないのですか！」

「俺はさる御方によって受肉召喚の儀式を受けさせていただいたのだ！ 並の淫魔など、そして聖騎士団などこの俺の足元にも及ばない！！」

「う、く……そんな……そんな、あ……っ」

「天使様！ 天使様がさらわれちゃったぞ、弓兵は、弓兵はまだかつ！」

「相手はオークだって聞いてきたんだ、弓兵なんて編成されてるわけないだろうっ！」

捕らわれた私を魔の手から救いだそうと必死になっている兵士達の視線に、情けないことに身体は敏感に反応してしまっていた。

（見られている……！ い、いえ、そんなことはどうでも良いことです！ 逃がさないと……彼らが魔物の餌食となる前に……！）

ゼノバットの鋭い爪を皮膚に食い込ませながら、隙を窺っても窺っても勝機はまったく

見えてこない。それどころか、彼がこれからしようとしていることが恐ろしくて恐ろしくて、私はチョロッ……とショーツに少しばかり小水を漏らしてしまってたえいた。

（犯される……、そんな、わ、私が？ 殿方と口づけさえたこともなかったのに!!）

「キキキキッ、お前は負けたんだ。負ければどうなるか、散々教えてやっただろ？ 大人しく、俺の牙とチンポを受け入れろ！」

心の底から愉しように笑った後、ゼノバットは私の首筋に鋭い牙を突き立ててきた。

「ひあっ!? あっ、あーっ！ や、やめてっ……や、め……！」

魔物の汚らしい牙が肌に食い込み、開いた穴から血の雫がたらたらと流れ出す。

「あっひっ、ひいっ……あがつ……はっ、ひいっ……っ」

おぞましさと恐怖とで震える身体の反応を楽しんでいるらしく、ゼノバットは牙をさらに深くまで押し込み……その穴に、自分自身の体液を注ぎ込み始めていた。

「んっ……？ あっ、こ、これは……!? あっ……身体が、あ、熱い……っ？」

首筋から顔全体へ、そして乳房へ。じわじわと広がっていく熱さはとどまるところを知らず臍裏に届き、下腹部へ……女の最も大切な場所へとゆっくり伝播していく。

「ひあっ、ああ、は、はひい……。こ、これって……！」

「ギギギッ、処女のお前には馴染みがないだろうが、これは媚薬だ」

「び、媚薬……！」

主に淫魔の身体から摂取され、市場で高値で取引される薬……その効能は抜群で、ど



れほど堅い職についている女でも、すぐさま発情期の雌犬のように狂わせるという。「人間の市場で売られているヤツは水で薄めたもんだが、これ俺の体内で生成された原液だ。クククッ、辛抱できないだろう？ ただでさえ身体に力が入らないってのに」

「……っ、ああああっ、はあああっ!?!」

「俺様の特濃媚薬を直接流し込まれちゃあ……いくら清らかな聖女であろうと、正義の天使様だろうとマン汁垂れ流して悶え狂っちゃまうだろう!?!」

「あっ……あがああっ、んっ、んぎいい……っ」

「あ、ああ……どうすれば！ 天使様、天使様がやられちまう……!」

歯ぎしりをし、己の無力さをなじるかのようにして私を見上げる兵士達。

「わ……わたひ、は平気れすから……あっ、ああああ……っ、んああああっ!?!」

彼らを励まそうとした私の声に苛立つてか、ゼノバットは憎しみを込めた手つきで乳房を鷲掴みにし、ぐにぐにと遠慮なく揉み始めた。

「あっ、あひいいいい……!?!」

雷が落ちたかのような衝撃が走り、視界が真っ白に染まって呼吸が満足にできない。聖痕の刻まれた乳房には抵抗力はなく、乱暴な胸愛撫にもビクビクと激しく反応してしまい顔がカアッと熱くなった。

（あっあっ、た、大切な場所から……あはああっ、あ、赤ん坊を産むための大事な場所から……蜜が溢れて……止まらない……っ、んあああ……!）

ジクジクと熟れた桃の汁が垂れるように、股間の割れ目が濡れて滴っていく。

「クククッ、なんだなんだ？ 楽園の騎士様はオマンコよりも胸をいじくられるのが好きなのか？ こりや結構な変態マゾ女だぜ」

（な、なにっ……こ、これっ……なんなのですか、あああ……! 胸を触られるだけで……ああっ、身体中が蕩けるような……ッ）

「だつたらたつぷりと揉みしだいてやるぜ！ 幸い、お前の胸は揉みがいいがあるからなあ……クキキキキッ!!」

「だ、だめえっ、だめ、やめてください……っ！ あっ、やめっ、ひっ、あひいいいっ!」グニグニグニッと、形が変わるほど激しく胸が揉みしだかれる。

「んっ……んいいいいっ……！ ひっ、ひいいいい……！」

乳房の付け根をしつかりと掴まれ、持ち上げるようにして揉みあげられると、それだけで私の意識は飛びそうになってしまう。

「あはあっ、ひっ、ひいいっ……な、なんでっ……ああっ！ だめ、ですのに……いい」
（胸を触られているだけなのに、どうして……こ、こんなにも感じてしまうのでしょうか？
ま、まさか……これも試練だというのですか？ わ、私の身体……どうなって……）

意識が朦朧とし、変化していく肉体に私が慄いているとゼノバットが無防備になった乳首をギユムツと強く揉みあげてきた。

「あっひいいいいいいいい……！！」

「キキキッ、ちよつと胸をいじっただけでマン汁でもうべったべたのドロッドロだなあ、騎士様よ？ 乳首もピンピンに勃起して、俺を誘ってきてるぜ……ヒヒヒッ！」

「ああ、い、いや……いや、い、言わないで……聞きたく……ない……！」

言葉でも私の意識を颯ろうとしているのか、さんざんこの痴態を笑いものにしたあげくゼノバットは腰を動かし、股間に……愛液で潤みつばなしの秘裂に赤黒く屹立した男性自身を擦りつけてきた。

「はふあ……、や、やめ、やめ……てくださ……！ ああ、やめ、あ、あ、うあ……あ」

あまりに危険なその感触から逃れようと全力で暴れたものの、力はすっかり抜けている。私は股を大きく広げさせられたまま、無防備な股間をただ淫魔に好き放題に弄られること

しかでなかつた。

「ホラホラホラあ……もう欲しいんじゃないのか？ このぶつといチンポを、聖女様の聖なるオマンコにねじ込んで欲しいんじゃないのかあ……？」

喉元で囁かれる卑猥な侮辱、そしてピタピタと飽きもせず膣口に押し付けられる太い突起……グロテスクな形状をして、私の手首よりも太く……ひよつとしたら握り拳よりも大きな先端を持つそれが、私の中を蹂躪するだなんて……。

そんな光景は、絶対に想像したくもない。

（それなのに……それなのにどうして……！）

「お前、まだ自分が優位に立ってるだなんて思ってるねえよなあ？」

「えっ……？」

私は、ゼノバットが目玉をギョロギョロと動かして地上の兵士達をジロジロと眺め下ろしていることに気付き、ぎよつとした。も、もしかして……この淫魔は……！！

「ああ、そうだ。てめえが俺に従わねえって言うなら……殺すぜ、アイツら。オラッ、いいのかよ？ 天使様はてめえが助かるためなら、平気で他人を見殺しにするのかよ!!」

「あ……！」

「……俺に負けを認めて、チンポぶちこんでくださいって懇願するならアイツらは助けてやる。でかい声で、皆に聞こえるように言うんだよっ、そらっ！」

「あ……あ、くううう……！」

絶対に、淫魔になんて屈したくない。淫魔に処女を奪われるなんて嫌だ、怖い、辛い。私は口をパクパクと開閉して少し迷ったものの、ゼノバットが衝撃波を眼下に放とうとしたのを見て、慌てて言葉をほとばしらせた。

「わ、わたし、は……エデンズリッター・ルシフェルはっ！ ゼ、ゼノバット様に、負けましたっ！ ま、負けた私を……どうぞ、好きになさって、くださ……い……っ！」
悔し涙が目尻に浮かび、うまく言葉を紡げなくなる。と、すぐにゼノバットは低い声で私の心に揺さぶりをかけてきた。

「誰かを殺さなきゃわからねえのか？ いつまでも上品ぶってんじやねえっ」

「……！ 私のオマンコに！ ゼノバット様の極太オチンポをねじこんでくださいっ！ 私の処女マンコに……ゼノバット様の逞しい雄チンポをください、お願いしますすううっ」
エデンズリッターとして、セフィロト様の前で戦うことを決めた時からそれなりに覚悟はしてきたつもりだった。貞操を失い、無理やり淫魔に強姦され、痛みに泣き叫びながら魔物の子を孕まされることまで……あり得る未来として想定はしていた。

それでも、それでもこんなもの、ない。

凌辱されるだけでは済まされず、自分から股を開いて濡れた花びらを拡げさせられ……下品な言葉を使って破瓜を懇願させられるなんて……。

「キキキキ!! ひはははっ、言いやがった！ 天使様が処女マンコにチンポ突っ込んでくださいだよ！ そおんなに言うなら仕方ねえなあ……そらよっ！」

「……っ、ああああッ……!!」

ぐわっ、と大きく身体を持ち上げられたかと思うとゼノバットは私の股間にクチュリと男性器の先端をあてがった。そして……。なおも信じられないような罵詈雑言をぶつけてくるのだった。

「おい、何黙ってたんだ。俺が挿れてやるって言ってるんだぞ？ ありがとうございます、だろ？」

「あ、ありがとう……ぞ、ございます……」

「感謝の気持ちが必要ねえな！ やっぱ誰か殺すかあ？」

「……！ ま、待ってくださいっ！ す、すみません、謝ります！ ですからどうか、どうか許してくださいっ……」

私は焦り、自ら腰を落としてゼノバットの男性器に股間を押し当てた。ニチュルッ、と接触の音が聞こえ、自分が何をしているのかもよくわからなくなってきた。

「んっ、ん、んふう……！ ど、どうかその極太オチンポで私の……私のっ！ ぬ、ヌルヌル処女マンコを貫いてくださいっ！ 私の初めてを、あなたのオチンポに捧げさせてください……！ 処女オマンコにオチンポを突っ込んでっ、掻き回して……精液を中に出してください！ どうかつ、どうかお願いしま……！ あっああああ……!!」

私の懇願が終わるのすら待たず、突然膣内に焼けた鉄の棒かと思うほど熱く太いものが入り込んだ。

「んぐううつ、んぐーっ！」

容赦なく処女膜を破り、一瞬で膣奥を突き上げてくるその硬い感触。

「あつ、あつ……ああつ、あがああ……っ」

愛してもいない男のペニスで、いや、憎むべき魔物の生殖器で初めてを奪われたシヨックで口を開き、ぱくぱくさせていると大きく上下に揺すぶられた。

「ヒヒヒッ！ どうだ……俺様のチンポで女になった気分はあー！」

「あ、あうううつ……ああ……い、いやああ……！」

ゼノバットは私の身体を羽交い絞めにしながら胸を揉み、そして下から上へと力づくでその汚らわしい肉棒を突き上げ始めた。

「んっひぎっ……んっいいいっ！ あふっ!! あっんんっ、あつあつあつ……！」

痛みよりも何よりも、今まで自分で触ったこともない神聖な場所を……子を作り未来を繋ぐその場所を、汚らわしい欲望にまみれた肉棒でえぐられていることが辛かった。

「あつ、んふっ……んっ、あつ、あつ、ふあああつ……ああ……！」

なににどうしてだろう、痛いだけのはずなのに、苦しいだけのはずなのに……。

（私のお腹、胸……全身が熱くなって……ふあつ、あああ……！）

身体のお腹の奥にまで入り込んでくる男性器に、敏感に反応してしまう……！

「あつふあつああ……！」

子宮を押し潰し、さらに奥に奥に入れようとグリグリと押し込まれてくる生殖器。



「んひいっ、んあっ！ やめっ……それ以上は入り、ませんっ！ ああっ、ああ、お腹が……お腹が破けちゃう……んあああっ！」

瞳に涙を浮かべ、股間からは愛液とともに鮮血を滲ませながらも私は未知の快楽に意識を奪われ、ひたすらそれに耐えることしかできなかった。

「お前は今から俺の肉便器だ。便器が抵抗なんてするんじゃねえよ！」

「んっんくうっ！ はあっ、あはああっ……！」

「キヒヒッ、胸もそうだがでかい尻だぜ。このエロいケツを自由にできるなんてなア……やっぱり淫魔は最高だなあ!! ギャハハハハハ！」

「っはひいっ!! んっ、ひあっあああああっ……！」

がしがしと力一杯に乳房を揉みしだき、ゴリュゴリュと触手ともいべき長く伸びた男性器で私の体内を犯しながら、ゼノバットはご満悦だった。

「っあああーっ!!」

熱い肉の棒が私の敏感な粘膜を、無遠慮に掻き回し体液で汚していく。

「はっ、ふあっ……はっ、んひっ、んっ、あはああ……ああ！」

私がついに涙をこぼし、弱々しく首を左右に振りたくつても凌辱の手は一向に衰えず、むしろゴツゴツとした太い性器で処女宮をえぐる速度が増すばかりだった。

「あっ、あぐうっ……あっああ！ う、動いて……動いて、る……ひいっ、んっ！ お腹っ、はひっ……引きずり出され……ああっ！ いや、いやあああっ、嫌あああ！」

「ああ？ なに嫌そうにしてんだ？ この俺が、俺様がお前のクソマンコ使ってたっぶり種付けしてやろうって言うてんだぞ？ 肉便器なら、もっと嬉しそうにしろや。ケツ振って喜べ！ オラッ！ オラオラッ！ マン汁垂らして媚びてみせろやっ」

絶望的な言葉を吐きかけられながら、私はそれでもどうすることもできなかった。

「あ……あ、あ……！」

「あいつらにもお願いしろよ。無様にイカされて、マンコに淫魔のドロドロの精液注ぎ込まれて……受精するところを見てくださいてな！」

「あ、は、はい……はいいいっ！」

涙が溢れ、嵐のような凌辱に耐えながらも私はどうしても兵士達の命をこの醜悪な淫魔に摘み取らせるわけにはいかなかった。

「み、みなさ……んっ、あひっ、はあっ、は、あ……ああっ！」

私は兵士達によく見えるよう、股を大きく開きながら涙声で精一杯叫んだ。

「み、みなさん、お願い、です……見ていてくださ……いい！ 私が……わ、私、が！」

イキながら種付けされるところ、を……んぐああああっ

「下品さが足りねえよっ！ もっとメス全開で宣言しろ！ はあっ、はあああっ！」

「しょ、処女のくせにオチンポ大好きなヌルヌル天使オマンコにっ、ドロドロの精液を注ぎこまれて種付けされるところを……！ どうか、どうか見ていてくださいつ、んおおっ犯されて、孕まされてしまうところを全部見ていてくださいいい……っ！」

私が考えつく限りの卑猥な言葉で自分を貶めると、それに満足したのだろう。ゼノバットは長く太い生殖器を膣の一番深い場所にグリユツと押しつけてニタリと笑った。

「おらっ！ 孕む準備はできてるかっ！」

「は、はひっ……できて、ます、どうぞ……ああつ、中に、中に出してください！」

「おらあつ、淫魔のガキを孕んじまえええつ!!」

「んばっ、ぎひひひひひ……!! あつ、ひああああああああつ……!!」

頭をガンと殴られたかのような衝撃とともに、大量の白濁液が、淫魔の精液が粘膜を白く染め上げていく。

「はひっ、ああつ、あつあぐうつ、クう……!!」

「おお？ キツキツのマンコがさらにキツくなりやがった。ひよつとしてイクのか？」

「イ、イク……とはなんでしょう？」

一瞬理解不能な言葉にひるんだものの、私はすぐにそれが何を示しているのかを自らの花弁に、蜜壺に、子宮に教えこまれてしまった。

「あふっ……ひっ、んっんあああつ……!! ああつ、だめっ、だめですつ、だめっ」

「あ、ああつ、イクって……ひよつとして、この……!!」

「あひっ、ひひっ、はひひひひひ!!」

私の口から情けない声が上がリ、喘ぎ声とともに涎が口端から滴り落ちる。

「イッたらイッたつて言えよ肉便器っ！」

「イッ……イキまひたつ、あ、ああつ、ゼノバット様に種付けされてイキまひたああつ」

子種は私の体内を満たすと下品な音をたてて外へ逆流する。太ももに熱い雫が流れ、自分種付けをされながら絶頂していることを強く実感させられた。

「はっ、はひゅっ……んあつ、ああああつ、イクつ、イクううううつ！ またっ……あつ……ああああつ、いっ、イックウウウウウ……!!」

「……さあて、トドメといくか……!!」

ゴブゴブと薄汚い体液を私の中に注ぐゼノバットが、カッ！ と目を見開いた。その予備動作には見覚えがあった。ゼノバットは衝撃波を放ち、なすすべもなく私を見上げている兵士達を……この国の民を一網打尽に殺戮しようとしていた。

「ま、待つてください！ 兵士達は殺さないと約束したじゃないですか！」

「ケハハハハハッ！ うるっせえなあつ！ お前は堕ちた、俺の肉便器だつ！ となればコイツらはもう用済みなんだよっ！」

「……許、せない……許せない!!」

私の胸に、怒りの炎が宿り再び戦う気力が……民を救いたいと願う心が蘇る。

「ルミナ……ーク!!」

「んぎひひひひひ!!」

私は咆哮し、空中で魔聖槍を出現させるとそのままゼノバットの頭に、両耳の間にグッサリとそれを突き入れ、淫魔とともに地上へと落下した。

「グギャアアアアアアアッ！ てめえ！ てめえ何しやがるっ！ アギアヤアア！」
「すべてを浄化する聖なる炎よ！ ノーブル・イグニス……ッッ！」

炎を放ち、ズチュリとゼノバットの男根を股間から引き抜くと私は全力で槍を引き抜き大きく振りかぶって構えてみせた。

「人に仇なす邪悪な魂よ！ その許されざる罪を悔い改めなさい……禁忌の闇の中で、永久に！ マジエスティ……ルミナスジャッジメント！」

「ギャアアアアアアアッ!!」

「やつ、やった！ 天使様が……天使様が淫魔を消滅させたぞ!!」

「み、皆さん……御無事ですか……。はあ、はあ、それならば……良いのです……」

私は内腿に精液と破瓜の処女血を垂らしながら、燃え盛るゼノバットの遺骸を確認してその場から撤退した。

（早く……はやく、へ、部屋に戻らないと……変身が解ける前に……うううっ！）

こちらは試し読み版です。

続きは書籍でお楽しみ下さい。